

県中教研 道徳部会だより

第 38 号

発行日 令和5年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 伊東 和也
題 字 金山 泰仁 先生

生徒が主体的に考える道徳科の授業

指導主事 下村 知絵

道徳が教科化されて、4年が経ちます。しかし、令和3年度の道徳教育実施状況調査では、「教師が一方向的に教え諭す授業が未だ見受けられる」「教材文の読み取りに偏った授業や、一問一答でのやり取り中心の授業が散見される」という報告がされています。道徳科は、道徳的価値の知的理解に終始したり、行為の仕方を指導したりする時間ではなく、生徒が道徳的価値を自己との関わりにおいて捉え、内面的資質としての道徳性を主体的に養っていく時間であるといわれています。生徒が主体的に考える授業を行うためには、教師が、指導の意図を明らかにしてねらいを設定し、生徒の意見を傾聴して受け止める姿勢で授業に臨むことが大切です。

県内中学校の道徳科の授業では、「導入時と終末時に、ねらいとする道徳的価値に関わる体験を日常生活から想起させ、自身の心の変容を生徒が自覚できるようにする」「揺さぶりや問い返しの発問、疑似体験等によって、誰もがもつ人間の弱さに迫り、心の揺れや葛藤から本音を引き出す」「ICTの活用、構造的な板書、学習形態の工夫により、道徳的価値について多面的・多角的な見方や考え方を促す」など、様々な指導方法が工夫されています。いずれの手立ても、教師の指導の意図に基づくものです。このように、「何について考えさせ、何に気付かせるのか」を明確にするとともに、生徒の言葉に耳を傾けながら、共に考えるという姿勢で授業に臨むことが、生徒が自己との関わりで道徳的価値を捉え、主体的に考えることにつながります。

教師の人間味あふれる道徳科の授業の積み重ねが、生徒の本音を引き出し、よりよく生きようと、自ら考え、判断し、実践しようとする生徒を育てることにつながると考えます。

(西部教育事務所)

「主体的・対話的で深い学び」を目指して

県部長 伊東 和也

「主として人との関わりに関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳科の授業はどうあればよいか」を研究主題とし、今年度は「道徳的諸価値の理解を基に、道徳的な考えを深め合う話し合いの場の工夫」を副題として研究を進めてきました。

第66回研究大会は、アドバイザーによる講演も実施されるなど、学びの多い大会となりました。私が参加した東部地区では、思いやり、感謝、相互理解、寛容の価値項目について研究を深めました。生徒が自分事として捉えられるよう、TTの活用、コの字型による座席の配置、構造的な板書、震災現場のスライドや演奏場面の動画視聴等、多くの手立てが準備されていました。部会協議では、T2の教員による意見把握が意図的指名につながったこと、生徒がスライドや動画を真剣に視聴する様子が見られたこと、板書の工夫により多くの発表につながったこと等、多くの手立てが効果的だったことが解明されました。今回、東部地区での授業者は、自ら授業者に立候補されました。アドバイザーから授業の展開等について質問された際、発問の意図や展開の方法等、自分の考えや思いを明確に伝えるなど、私にはとても頼もしい姿に見えました。また、郡市部長会では、「学級担任以外の教員が実施するローテーション道徳」「1人1台端末を利用した事前アンケートの集計や意見の視覚化」等、様々な方法が紹介されました。一方、「生徒の実態把握が十分でない中、ローテーション道徳を実施しなければならない」「意見を学級全体で見られたくない生徒がいる」などの課題もあり、一人一人の状況に応じた授業づくりに努め、生徒の主体性を大切にするための研究を進めていく必要性を感じました。

今後、「主体的・対話的で深い学び」を目指し、道徳部会の部員と共に研究を進めることで、生徒の道徳性が身に付くよう努めてまいります。

(富・岩瀬中)

第66回 研究大会報告

東 部 地 区

富 山 市 立 北 部 中 学 校

東部地区大会では、富山市立北部中学校を会場にして、竹澤暢洋教諭、室田桂俊教諭、羽根将貴教諭、渡辺卓也教諭による授業提案が行われた。本日よりでは、3つの授業の概要と指導助言について報告する。

〈第1学年〉 竹澤 暢洋 教諭
室田 桂俊 教諭

主題 その人が本当に望んでいること B
教材 「思いやりの日々」
(出典：東京書籍 「新しい道徳1」)



「妻の介護をする夫の経験を基に、思いやりにはどのようなことが大切か」を考える授業であった。T1が生徒と対話をし、T2が板書を行う役割を明確にした授業だった。問い返しで生徒の考えを引き出し、可視化された板書の工夫で、生徒の声をより多く引き出す工夫がみられた。

部会協議ではねらいに迫るための発問の工夫と事前アンケートの効果的な活用法について話し合われた。

中川伊通子指導主事(東部教育事務所)からは、教材分析と発問の吟味、学習形態の工夫について助言をいただいた。

〈第2学年〉 羽根 将貴 教諭

主題 本当の友情とは B
教材 「注文をまちがえる料理店」
(出典：東京書籍 「新しい道徳2」)

「相手の間違いを受け入れて、許すことのできる心とは何か」について考える授業であった。中心発問では、教師が生徒の発言に対して問い返しを効果的に行うことで考えをより深めさせ、寛容な心をもって人と接することの大切さに迫った。

部会協議では、動画の効果的な活用と座席の工



夫、話し合いの場の工夫について話し合われた。

上田徹指導主事(東部教育事務所)から、中心発問の工夫と問い返しにより、生徒の発言を大切にする授業の在り方について助言をいただいた。

〈第3学年〉 渡辺 卓也 教諭

主題 人っていいなあー思いやりの連鎖 B
教材 「一冊の漫画雑誌」
(出典：東京書籍 「新しい道徳3」)



震災直後に起きた小さな思いやりが人から人へと広がっていく思いやりの連鎖について考える授業であった。構造的な板書の工夫と、話し合いが十分にできるように時間を確保したことで、生徒の多様な意見を引き出していた。

部会協議では、話し合いの場の工夫と板書や座席の工夫について話し合われた。

米田歩指導主事(東部教育事務所)からは、構造的な板書の工夫と道徳的諸価値の理解を深める授業の在り方について助言をいただいた。

平 雄造(黒・明峰中)
作田 恵美(滑・滑川中)
近島 直美(富・西部中)

〔研究主題〕主として人との関わりに関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳科の授業はどうあればよいか。―道徳的諸価値の理解を基に、道徳的な考えを深め合う話合いの場の工夫―

西部地区

砺波市立般若中学校

西部地区大会では、砺波市立般若中学校を会場にして、中村圭吾教諭、野口満成教諭による授業提案が行われた。本日よりでは、2つの授業の概要と指導助言について報告する。

〔第2学年〕中村 圭吾 教諭

主題 情報モラルと友情 B

教材 「ゴール」

〔出典：東京書籍「新しい道徳2」〕

導入では事前アンケートの結果を提示することで、生徒は本時のテーマを自分事として捉えることができていた。展開では、5人の登場人物の心情をそれぞれ考えることにより、多面的に考察することができていた。生徒が意見を発表した後、「似た意見の人はいますか?」と問い返すことにより、多くの生徒の意見を拾いながら授業を進めていった。途中、タブレット端末を使って意見を共有したことで、より多くの生徒が話し合い活動に参加することができていた。



大菱池仁子指導主事（西部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

- ・導入で事前アンケートの結果を示すことで、ねらいとする価値への方向付けをすることができていた。話し合いでは、似たような意見をもつ生徒の考えを聞いたり、「なぜ」「どうして」と問い返したりすることで、生徒の考えを広めたり深めたりすることが大切である。
- ・タブレット端末を使って意見を共有したことで、生徒はより多くの意見に触れることができた。友達の前で発言することに抵抗がある生徒にとって、ICT機器を用いた交流は有効である。
- ・ねらいに関する生徒の実態を把握し、実態に応じた指導をすることが大切である。生徒に何を

気付かせたいのかを明確にした上で、道徳的価値の理解を促すよう発問を構成する必要がある。

〔第3学年〕野口 満成 教諭

主題 コミュニケーションの原点を見つめて B

教材 「心にしみこむ“言葉”の力」

〔出典：東京書籍「新しい道徳3」〕

資料の範読を朝活動の時間に行うことで、個人で考えたり他の生徒と共に考えを深めたりする時間が十分に確保されていた。展開では、相手の話をよく聞くために大切なことをキーワードで答えることにより、より多くの生徒の意見に触れることができ、生徒同士で話し合い活動が行われていった。その際、各生徒のキーワードを、タブレット端末を活用して共有することで、円滑に意見を共有することができていた。



下村知絵指導主事（西部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

- ・生徒の実態を踏まえた、ねらいが明確な授業構成であった。キーワードを入力する場面では、「みんなもこういうことある?」という教師の問い返しにより、生徒は自分自身に目を向けることができ、考えが深まっていた。
- ・話し合い活動はペアやグループ等、実態に応じて工夫することが大切である。また、「友達の気持ちや考えを聞いて、自分のものと比べながら考える」等、道徳科での考える視点を生徒に例示しておく、充実した話し合いにつながる。
- ・本時の主題に迫るためには、伝え方や聞き方について話し合うだけにとどまらず、相手の気持ちを考えて話したり、聞いたりすることがコミュニケーションの原点であることを押さえることが大切である。

野口 光紀（南・福野中）

第66回 研究大会報告

第66回東部地区大会

令和4年度東部地区大会では、國學院大学文学部の澤田浩一教授に、アドバイザーとして「道徳科において大切にしたいこと」と題してご講演いただいた。

1 はじめに

道徳が教科化になったきっかけは、いじめや自死の問題である。いじめの過程で、孤立化の兆候が現れたら、この段階でケアをしないと手遅れになる。道徳は、様々な教材を通して、心（情意）とはどのようなものであるかを考えたり、困難に対して予防的措置を施したりするために、子供達の心を育む大切なものである。小・中学校での道徳では、道徳的諸価値についての理解を求め、自己を見つめ物事を多面的・多角的に考えるということについては意識しているが、人間としての生き方について考えを深めるといふ箇所は、曖昧になりやすい。そのため授業を通して「自分はどのような生き方をしようか」と生徒達がどれだけ深く考えることができたかを振り返りながら授業を行ってほしい。

2 授業づくりについて

道徳性とは、心の中にあり目には見えないものである。自立した人間として、他者と共によりよく生きることとは行為であり、行為の手前にある身構えが道徳性である。道徳の教材の多くは、出来事のまずさを例にして、なぜそうした失敗や問題が起こったのか、また困難に直面したときにどうするべきなのかを話し合い、具体的に考え学ぶものである。

(1) 子どもたちが元気になる授業を

今回の授業のように人との関わりがテーマの場合は、授業の展開が難しい。授業の中での対話とは、「考え」ではなく「考え方」を共有していくための時間であり、話し合う過程や、生徒が自分の思いを語ることが大切である。道徳の指導で大切なことは、指導過程を固定的に考えず、目の前の生徒のために教師が知恵を絞ることである。また、学年や学校全体でつくり上げていくことが課題である。多様な教材とともに多様な切り口も必要であり、教師自身も広い視野をもち、生徒の価値観を狭めないよう工夫することが必要である。全ての生徒を大切にすることで、生徒一人一人が大切にされていると思い、子供達が元気になるような授業を組み立ててほしい。

(2) 自己の生き方に考えを深める

他者に対して感謝の思いをもつことは、自己肯定感の高まりに繋がる。思いやりと感謝を生かした授業づくりに取り組んでほしい。相互理解・寛容は、他者の話を聞いて多様な視点を知り、自分の生き方に生かすことである。道徳は、行為による存在の建設である。自らの行為により、自分をつくり上げていくものである。思春期に本音を語らせることは難しいが、自分の中にある本音に気付くことは大切である。人間の中にある善と悪に気付き、弱さ醜さを克服してよりよく生きようとすることを学ぶことが人間らしさである。

3 最後に

道徳の授業は、実践を通して向上するものである。一問一答の授業から対話を通して生徒の想いをよく聴く授業にしてほしい。教師は、学者・役者・医者・易者であり、特に易者とは生徒一人一人のよさを採り励ますことである。また、道徳の評価も同じである。一人一人の生徒のよさに目を向けて把握しようとする評価をしてほしい。思春期という多感な時期に生徒達と向き合う教師の影響は大きい。道徳の授業を通して、よい出会いとなることを願っている。

(中・雄山中 中谷 嘉子)

第66回西部地区大会

令和4年度西部地区研究大会では、京都産業大学現代社会学部の柴原弘志教授に、アドバイザーとして「『特別の教科 道徳』における質の高い学習指導と評価」と題してご講演いただいた。

1 発問の工夫

深い読み込みを行い、的確な教材分析をすることが大切である。学習指導要領解説の内容項目を確認し、ねらいを明確化・具体化する。発問では、「自分が自分に自分を問う」という「自己内対話」を特に意識して、本音を引き出し、道徳的価値に迫る。そして、生徒により深く考えさせる重層的発問としての「問い返し」や「ゆさぶり」の工夫が大切である。授業において、範読に時間がかかる教材のために、多様な意見交流が十分に行えない場合には、事前一読が効果的である。生徒一人一人の初発の感想は、発問や展開の工夫に活かされたり、振り返りでの比較から、自らの変容や成長を実感させたりすることにもつながる。

2 考えを深め合う話し合いの場の工夫

周りの人と共に、語り合い、聴き合うことにより、多様な考え方に触れ、自分の考えをさらに深めることができる。「聴く」とは、目と心も使い傾聴すること。相手の表情や仕草等を視つつ、心の声を「聴く」ことである。教師も、生徒と共に自らを見つめ、思考して、その内容を他者と共有し、繋がり合う楽しさを感じられる授業となる。教師も一人の人間として、自己を見つめ、生徒と共に学ぶ姿勢を大切にしたい。

3 指導と評価の一体化

到達度評価ではなく、個人内評価である。言語分析と心の内面に寄り添う観察を大切にしたい。何を学ぶのか（内容知）、どのように学ぶのか（方法知）を具体的に想定・共有することにより、質の高い学習指導となり、指導と評価が一体化する。自分の体験や思考等を、他者と比較しながら、メタ認知（自己認知・自己理解）をしつつ他者理解・人間理解、そして価値理解を深める。一面的な見方から、多面的・多角的な見方へと発展させているか。道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった評価の視点から、生徒の学びを捉えることが大切である。評価はフィードバックが肝要であり、通知票等での記述評価のほか、授業中はもとより、道徳ノートやワークシートの返却時にもできる。生徒のよさを認め、励まし、勇気づけられるように受容語・評価語を積極的に心がけたいものである。

4 ICT機器の効果的活用

事前アンケート結果や教材の提示にも、効果的に活用できる。教材内容を確認する場で、挿絵等をデジタル化して提示すれば分かり易く有効である。ただし、生徒がICT機器を操作している時に、次の展開に進むのはよくない。ICT活用はあくまでも方法であり、目的化してはならない。

5 リレー道徳

ある教材の授業内容を板書等で共有しつつ、各クラスの担当が日時をずらして順に授業をしていく。各授業での気付き等を順次共有することで改善された授業ができ、次の学年に引き継ぐことで、より質の高い授業となる。

(氷・南部中 森永 真未)